報讎奇談

自來也說話

へ13
3329
4

へ13
3329
4

報仇 自未也說話卷之四

奇談

武江 應和亭鬼武著
高喜齋 校合

大正十年八月廿九寄
本大學出版部氏贈

五十嵐曲直與朝妻歌之助比試併速水雅次郎水練条

軍執カ曰使智使勇使貪使愚智者事立其ハ功勇者好行其志貪者慾趣其利愚者不顧其死因其至情而用之と好形て速水雅次郎ハ軍太夫の姪と奏ひ追跡ーちども行弟知ぎあバ詮せぐ〻まる平幡へ立回るよ去や村長より知縣廳へ術へ捜使も泳ぐる動静あれバ那村落へ導行身奇より者と申立父母の亡骸を世事ひ法ゆの寺淺ゆ葬追善供養を馮義世上ハ仇と孝る一条よんを変し自未也乃立所ル俱ゆ尊ぐやと戦後

路を此所那所と遊歴る去程に源太郎早枝の横死を聞て鹿野苑
軍太夫は仕業なりと聞へ得れバ領主よりも搜索れども行方知れず
後呉賢邑名越長兵衛ハ女児美鳥を源太郎に妻と做る事なれバ
此動静を聞よりも何卒義子に養父の仇を討せて夫につけても武芸
を学せんと想へども農家の事故可然師もなく熟々案じ煩へけるが
今又忽地学ぶありとて対手なき方にハなき一個にて容易討取る
ことは究竟なし世上ハ武術に達せし聟を撰ひ動静を手明助鍛を遍く
仇を報せんと想ひ始る故人毎に武芸に精しき人あらバ其の聟に世話
あれかしと頼む急ぎ独子這時兄弟十五歳容貌美麗にして殊に富貴
乃長兵衛なれば近邑の者皆々聟にならんことを願ひけれども武芸なきを

農人故新に剣術杯稽古始めるに旅学の人に独子一日長兵衛の家へ深編笠に
顔を隠せし士一個紫の搭捕なる大振袖に萌黄千筋の茶の袴を着し
大小を横たへて端手なる風流の姿なり僕に包を持せ這家に到りて案内を乞
取次の者何所よりと問に那士答て某ハ胡妻歌之助
業平と申浪士近世までさる剣師にて小性勤しものにはへしが立栗
此業平朝臣の後を慕ひ和歌の道に志し通に此道に不快に侍り
の折々ノ道に女児まで遊び諸芸の道通じ殊に武術に精しきの
当家に聟なきと聞て嫁と与に成せ給はんと思ひ及び僕も優寵ありながら
半点武の名も拙くれども身安に相見まほしく長兵衛殿に枝の
一手も備一覧んと遠く尋ね来しと申述れバ長兵衛頓て一間へ

儔しかれハ皆て侍女婢らハ驚し起て目を闘惚れ来何ならん優漢子やらんと
思ふる諸兵晴に透看せるに鶚之助ハ編笠投捨打通りきしくえ前髪立
の丸額にて髪の毛ハ唐祖のごとく面色鼠に似て口窄向歯反たる猿眼
さも皆に風俗にて歩行入り坐につけバ衆皆呆果咲ひを聊しあへ
ば其ても侍女共に旌華く対し嬉しげに打咲ふにぞ長者謗制して立出
看よ何様醜若気あれども斯る人に社智謀れ枝熱しあるものをや
かん三国の時鳳雛先生ハ貌醜ともて呉魏に用ひられずして遂に蜀国の
元帥として第一の大功を顕せし例もあれバ猶も捨り置ぬなれと
勧ひ恭しく礼を尽し宴終て接待事畢れハ鶚之助ハ懐中より短冊
一枚取出しこれハ集の詠歌なりしとて筆を雑にあるもと当れ行よ太身

思ふる夜乃一読に当きんと筆て迎ふ主ぬ一見なりけるごとく思ひ給ひ短冊
長者深く這世葉に素好なる故嗚呼悦ばさんと押戴けバ是れバ
乳夫と呼れてゐるを把娼妻や柳縁なるごとくも上酒なし
業久しく鉄釘乃ごとき酉常まで迎ふるぬ世ハ書を読む旅窓へさを
甚く感心乃姉ふらせん中に想へらく這奴太腐魂なるや但虚白痴
はかある欤何にもせよ先止めん無く動静もみんぞやと想ひぬれど何れ
武術の練熟も浮見頼す座れぬど策こ一両日逗留あるべしと客舎に
止めぬ依系鹿野苑軍太夫ハ勇源太郎女夫を彼挙にあらして
今ハ偏じさり乍ら嫁閃へも帰りぬと想ひ従是冥土子も汲術
師範して世を渡らめと名も井宮曲搭と改め有姿れ斬妖数と

弄び物
長次郎が
死
さるる図

あり呉賢村の辺りに来るべくとの噂を聞に名は長宗清といへる大百姓
武術に達せしものを聟にせんと望ましけれバ沙汰おれバ兼て中に及
名哉あまてらも近頃支配遠ハ家面師を不見知社僕僮女児に剣法
を教ゆるハ此を岡ハ少しく遠けれとも楽しみがら聟短とありて菜花の身と
あるへしと又く欲心芽し長宗清方へ尋来り書面を請ひ形ニ十入れハ
一間に通し長宗清対面およそ身丈五尺八九寸顔色赤く頬骨たかくて
髭逆上生尖り有髪なる相貌天晴一曲あるべうあとて見たれハ慇懃に
款待先逗留あるべしと藏しがら舎に先是両個の浪士に酒肴を出し
饗應なし其后長宗清典膳に向ひ大人武術師範といはれバ練手れ
事ハ申に不及枝藝の程清見とやも悼ながら這に倖ひ朝妻

歌之助とやら浪士此仁も爰に在れば聟手継申すが那んと武術の事まで申されけれ
此中さへ客舎に在り大人此人と一緒に技を試み給へと聞けるに
典膳ハ大に喜び承知せし所で対手に為り申さんと喜ばれば後長宗清
歌之助を相見ん這回奉て典膳と申して剣術師範せらるゝまでも尋
ある足下逗留のまを此の武藝を識んことを観ませば素術
玉合玉りんやと尋ねるに朝妻をも及ばるゝ歯を剥出し絶倒する大笑をし
名を呼りの機前鍛の事も是れバ自饒して剣法ハ師範杯と誇り嘯り
まうやとふ方の人りれど捨ハたるこ与なれバ其のまゝさらなくやや某と
比試好をへバ対手にありて返せ申さんと差へ家まで長宗清もされバ
こ其此人の廣言果して武術に猶れし人あらんと想ひ良鋼鉄真合

あらし〳〵と五十山風朝妻ゆゑも紛し吹れて両個支度調へ長袴
廣庭に鬮刀一組並べおけバ熊之助乃出来て桃色縮緬の大振袖よ
紅の玉襷を掛中高に持筋掛る小文魚乃襷持股立取りしみ小白練の鉢巻し
締襷書乃芽乃四方に満せさる夫様子を立より世乃あり八典膳が襷の
股立ありしより上面色も青くも白れども敵を見る所で身拵え近く
襷も掛けんとて向ひし典膳へ思ふしと歩行出る村落の者八里を見ると着て敵
せんと左右に別れ堅唾を呑であつれバ甘覚共も遠離まとて看敵
爰の事は見るハ大抵漢子朝妻を小兵にしもゆ醜少年宮を拏ふ
小鳥のでくつへさるるを手朝妻頬て華冠乃出るをとて命に笑怖し楽識
凄相貌を見も書く一打に命をとも多ひあんさんすれたゝ命を一悔と

おんと迦へるさあゆゑて揺振熊助乃刃手道毒刃方一禮して熊助刀を取ふ
典膳眼を活と睜開意もやしよな瞋眼に熊之助呼と叫び纏打撥して尻居に
華法と典膳笑刀をもて首の背も折よと打ければ燥ぐるやあれん跳るとき
勇みて所傳熊助乃投棄衷乃方へ迹遠とびて千鳥足て逃行バ典膳も呆果
若嗚脇し大ぐく上る塵で看敵せる人〳〵ハ大聲上て拜喫権八ひとも止ざり
外に遠者佐置出に速水雅次郎八敵の行影其所此所と尋ねりて今日
遠呉嶽邑に到り此識の噂を聞て剣術滑氣の浪士と死し甚情し若や
敵なる手掛りあるやとおもひ弦素敵の身なれバ我の名ハにふざれとも那
浪士と共に武の藝術も極さんと長の信に逗留なれしり菓八未熟なれどもと
諸国武者修行仕る速水雅次郎と申者にて候へちら遠く剣法所望

ゆゑ偏さ遠留と申す長者殿あるじの那先生申も知音よ相的度まうさふらふとやうに入れば老長者又申やう歌之助の類ある故李何的者有りて迚も無強共乃なおなじ女児の傳と遠きに女子嵐くと迎ひ出でゝ雅江郎ちらも大喜く請ゝ相見の歌之助と八事始り前髪立ち義丹年未十六十歳とうれとも五華動言語應對乃さとやうふ中年紀此世丹年這上に武藏乃国ゆ女児ぐゝ女子八縁婚組ありと迎ひ

りまゝ別舎ゆ止ゝ戀ゆ歎待り居越る女児英多八石圖雅次郎の容顔を垣間見る事を誰べき英丹年ゆ越ゝ戀ゝ若衆樣人連ひ這人とゝ我祇夫とも倣ちゝバ一夜の情ゆ百年乃命もおごり情ゝ形ん之恩の情雅歌ゆして折ゝ客舎ゆ通りと姫女ゆ見ると

やくびとり兄覗くさまを雅二郎も何んゆ〳〵義を着ゆ身顔例〳〵艶ある女見形れぐられん世家ゆ女児義島ゆめと想ひ出ゝ

芳名ゆ這家ゆ撰玉章ゆ〳〵遇ゆ晴ゆ姫女と遇那文

祇雅ニてゝかとゝゆ知ゝる中くこれを授ゆ知ゝられん情を知

覺ゝる事ゆ

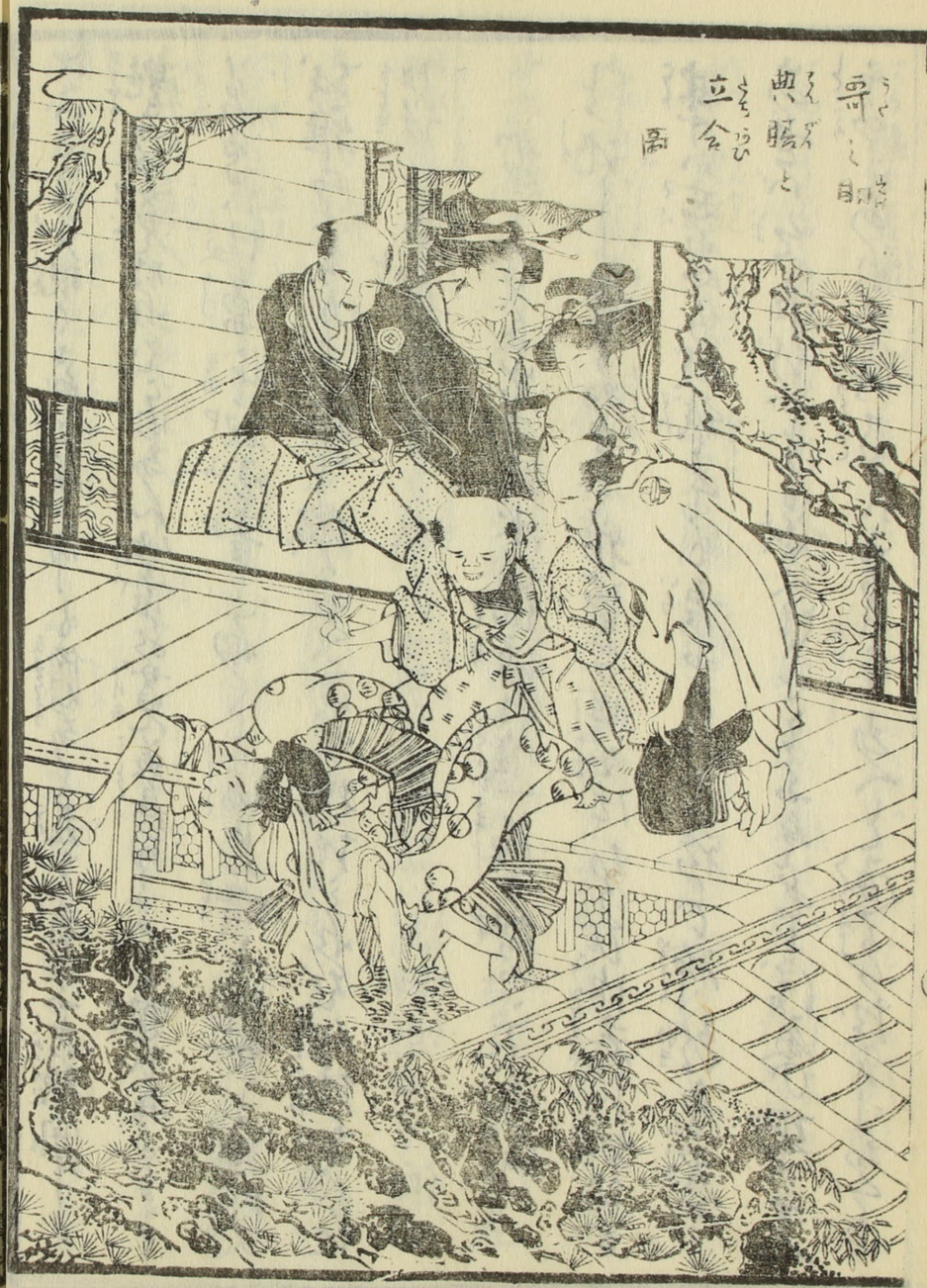
かくとゝゆ岩間ゆ水の細流れ唯一筋ゆ想ゆゝゝ祇

と詠ゝ〳〵あゝゆ雅江郎姫女に申ひ出志ゆ切なる

事ゆ忘れやらず祇ゝゆ書中ゆゝ移ゝ所歌ある文ゆ

あ書バゝゆ形ゆとゝゆ答ゝ〳〵ゝゆ長者殿の想ひ人

ゆ申ゆあれゝゆ世ゝゆ通ゆ知ゝ


寄合
與瞎と
立合
圖

されぞなをかくしも動揺と傷をとゝのへども新法あれども愛
とゝまる期くぐる大事の おろし少年 あれども更に服もつざるもく
さらに見てもまた新人にんぐやと第を大いとぐ意況なも世ゝ
あゝまこと瑞夏女ちんぐ情をとゝろかけ 婢女のもとも鄭ゝく
とゝもらけ知たまぬ加藤ゝ知て面目ゝ再び那人い素
婢女よ相見も面伏何娛ふ契常と女児意の一筋ゝ狂気
をゝひ清潔ゝ事をゝ五更の汎裏により 僻静出
居住の後ある 抑ゝ聞 とゝる到り那池ゝよ身を投ゝ隔れ
死ゝぬまでゝ人ゝ 浮史あさられたらでゝ ゝ主人
長多清ゝ半ゝ 拠青あるよ眼ゝ立ゝられば法口の戸明放

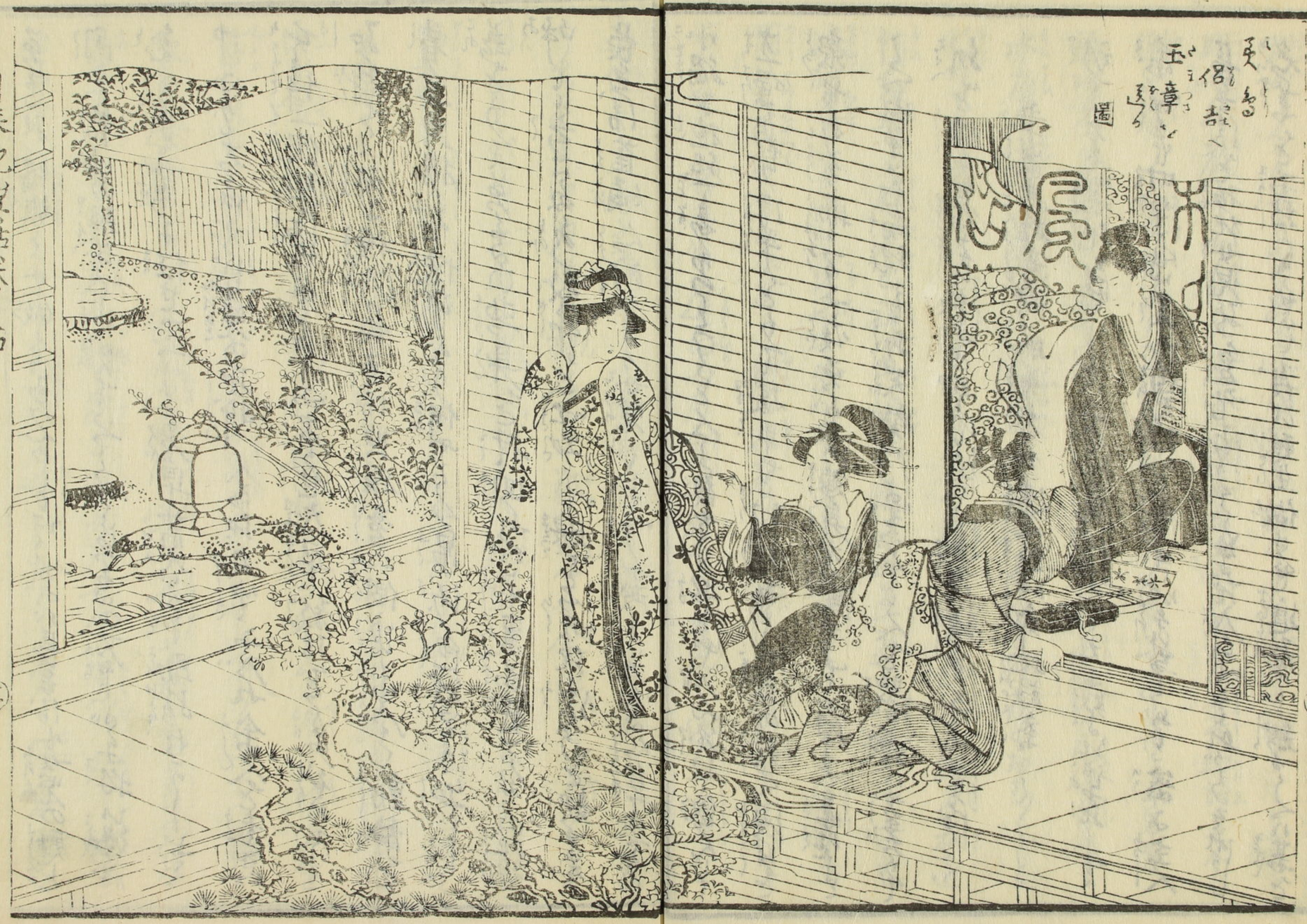
あゝ人ゝ多と降ひ光を逆戒のゝ ゝ嘉と祈ゝ
ゝ面ゝ女見乃房室と着られ義ゝのゝ番さよと
過ゝ ゝんとゝゝまび書亜と池せゝ 文のゝ ゝ大ゝ
投られぞ黄ゝ 手海ゝ ゝ知人を廻ひ祝ゝ嘉と
ゝゝゝゝ雑面答ゝ加ゝ ゝ柳ゝ関ゝ身と流れ出せる色を
ゝゝゝゝまぞ衆皆狂惑那淵ゝ到り着れぞ池の逢ゝ 履
晨撒あゝまぞ安ゝ世ゝ ゝゝゝ間ゝ知ゝ 進
水を潜ゝ 粒ひ上ゝゝ長蓼 美人ハ狂気ゝ立巣
辻渕ハ切岸高ゝ着ゝ ゝ緑のゝ ゝ水屋乃源ゝ
ゝゝ主亜ゝゝ中侍ゝ 程乃池ゝ ゝ衆皆慄ゝ

跳りくんとりあるものもあらざるにあらず雅之助は系敬より引ることよりも
呼吸の教りおの繁記這者機毒あることを知れ何事助得さもんと
渕の深きに駐殺あれば誰池に入るべく移りんとい中あるもいらざるべく
雅之助義と見て兼ていくらくと伴某半点水練をたんぱ仕れば
水底より出り亡霊なりも捜出しまいもせんと疾者もかりくと
叫びて出ては赤裸にあり雷と誰く孔を引くに縄刀の柄を
後手に結く縛る包禅の上に帯と締こみ一刀を指殺つさも
逮捕すまいまいさる池中にざんぜとこそと跳出ぐり出るは
周八九百歩もあらんと郷の程あれば御暫し時刻移るよんく
ようやと着るち遠向中の岸に紙下り名乗と浮生者と

小編に抱記一島あり立ちて観やり紙をやん筆や細んと
立噪うち行手をとりて援手を切雅あく世方の為に
恩者打者助上る疾者あり遊身塗堅りて[illegible]島と
[illegible]両親に打哭驚師に業よりと人を駆せ或は業りて
紙を温先痛者に手を者[illegible]ども更に論ぞあり[illegible]

五十嵐典猪奇術助者る併速水雅之命比試条

初て見る水地をせしかば[illegible]を典後ずて大[illegible]記事て
系紙もも叫ばるば変て西天州と用べき[illegible]めと盛より主人
長[illegible]と抱記見て変死水[illegible]記入[illegible]
名[illegible]と[illegible]再び甦生做させ進[illegible]


天竺徐福吉へ玉章を送る図

弟子の婿聟とも做しまうんやとけりあれば長者ぬも女兒の甥と
同じ家後の難なく強慢てそうらう弟子の不命ぶ子拾い傷ば
免も角も命よ任せ中つゝ者同早女兒が命助ばけ一つ
中ゆで去らくば女兒の聖人人ある犬中ゆ入れ余人と去きけ
中一個所落れと中ゆ世太早敷ぬて弟子の
聖を一間ゆ捨ゝ長者ぬ典猫喜二個中ゆ動静を
看る典猫ぬ懐中より何やらん帛紙包紙ぬ
数をりて弟子の胸ゆ投げ寄ぬ弟子の背
呼しぬ云さゆ数を吐出ぬ眼を開ぬ
長者ぬ萬蔵ん所ゆ女兒と呼ぶ殿ゆ弟子ぬ
妻何とて呼ばあるやと問ゆゆで使ぬ難ゝとゆ人抱僕
ぬ中ゆ入ぬ典猫を神ぬて数ぬ先者ぬ送る人ぐと
ゆゆ人ぬ云ば衆皆奇異の想ひをぬ送る家ゆ
西天竺の奇特ぬ番といるもいるあり彼ぬ一両日を経て
弟子ぬ疑ぬ疾気ぬ病ぬ去ぬ中ゆ典猫がなり
泄ぬ命を助ぬ遣ゆ那人と婚姻ゆあんとを結ゆ
女兒弟子ぬ説法ゆで弟子ぬ
あんと速水雅ゆどのゆん速ひ中ゆ意ぬ風仏を加ぬ中ゆ父ゆ
讐を計くまぬゆ柳ぬ剣ゆ隠れ地せんと弟子ぬ極ゝ嘆ゆ
さゆゝば山后とても弟人と婚と歩ゝゆば僕中ゆ命を

失ひなんやうにせで父母舅姑に不従不孝のものとハおぼされん
されども平日父上の教にも女ハ二個の丈夫に孔擬さるゝを
貞操と做ることを子妾雅次郎とのかゝる快楽がかし絡く
ねど柳が関の水底より延上ても此時を手ひの孔を幸く
拘上おもひしく八疾妾ハ雅次郎にわかれしのちハさらに開く
此上こそ世に孔でかくり時八女の道を捨父上ハ教にも從ひ
すべからく家の道理をおぼしめり典籍とのに程能断雅次郎に
その子娶得りなバ生し世に忘れまじと心苦く
両親も此理に從ひし若何にも其訳らきゝ△典籍とのお定め
今もなる深じきりぬかゝ雅次郎ハ始より婿にとらんことを

不得已も典籍と云八会と婚く幸さりしもの也れバ幸何うけひらんや
先其折入るく馬乃ぞやしと暗に雅次郎を一間に拒み女児の
切ある新し只下の意ひもりみて此上ハ不命助給ふにも聞じ
何卒不肖ながら弟なるが婿と為りて家相続ありしとあらぬぞ
雅次郎やゝ幸に姓も変はる其事を知らくまでの忍妄思なる
心ちもせぐうれバ然あれども其はしき余仮私ある身なり
すべからく唯々知りも申されバさらに親しめより心得ぬ度子も
強て面若も付しがさりながらさほど追り切なる脇差手下に倒
如何なり此上ハ命に従ひ其妻と必定逆新郎を拒むの後ゝ
目出度婚姻為し申べし夫迄ハ其と立号ともかく隠しとよ

許嫁つきて長兵衛も手に御志なりとも承引し女児も大に悦喜申
さん衛 両方共に急で婿を探しけるが身ヲ尽して大切
あることなれバ容易にも打明かたくけれども口外の他言
ハせで廣く婿佳と探れぞ世々有の侍に語り申さん原
義なるハ趣旨あれども女子なれバ此の事に物ハ二男小ぐりし
侍るべきに依れど當所の知縣勇源太郎と申義士なる故
生れ女子緒し無双女子にて當国平幡といふ所なる何某の
申し討れし故女児子生れ父が敵を討せざれバ一旦操じ奴当の
義を可んべからず女児も只願これを執ひさすれども女の叶ふ絶
強くまで仇を討んとてもかなふまじくすんびる故に武術子

遊せし人なくらん婿として一助剣を遣べき達人を共にと媒介を
聞て雛形ハ暫し呆れてありけるが侍くる家衛州因縁ちな
何を仰ぞも申さん其れ手に勇猛まる斯村の実子信吉郎と
申もの幼が幼頃より他手子實遠國なれバ當国へ参りて申ス女子
父母の種死の物語に行遭ひそれとも志なれど讐ハ捉逃しやでも
縁ありて父母なることをも知りて夫より仇の在所を捜求む御徊給ふ
これまで雛面中せしかど此后ハ共に只其の仮に仇を報ふ
亡父母が亭晩時し中さんと聞より長兵衛依天し新の事
ともありしが慈便當父が手を助けく延合婦子なり
すれぞ從者源之進との旅僧子實子一個ありつれど子細

[illegible]手に育てられくどもの所しい男をと娶ひ合の女夫と
[illegible]し言を見下げられよ這式歟[illegible]志ある上は誰か藤
[illegible]あり女児も俱よ仇討の延連[illegible]れし世事妻女児
[illegible]せ彼怪[illegible]と[illegible]
あり他つまとまとまるべ[illegible]と所あば何[illegible]
[illegible]遣ひ[illegible]と怪ひ勇勇[illegible]ひ[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]婚とあらばやとん[illegible]
主人長[illegible]女児[illegible]
[illegible]を[illegible]身の極[illegible]女[illegible]大人乃妻[illegible]
[illegible]と品[illegible]

申せども曲[illegible]れ[illegible]一旦約[illegible]上[illegible]人是[illegible]一回を
義[illegible]と妻にも[illegible]人とあるを長[illegible]
[illegible]偽は連求い[illegible]其浪士[illegible]面會は[illegible]
[illegible]せ[illegible]人と祝婚[illegible]
試[illegible]打[illegible]楽[illegible]人[illegible]
[illegible]も動静[illegible]武術師範[illegible]
[illegible]沈[illegible]先[illegible]試合をとりて[illegible]と極[illegible]楽[illegible]を学
あれと[illegible]長[illegible]又[illegible]典[illegible]
水[illegible]より[illegible]上[illegible]と[illegible]婚[illegible]
素[illegible]と[illegible]武術[illegible]

典膳
奇術
浪花炮を
のろう
圖

あれで大人の技をうて那が年を打塾得んの上足下を嚼とも
極えやさーとありれば典猛発矣打領辞兵小童子打兵んを
いとん易く想ひてづれで彼是中丸面倒なり唯今当と言ひ
ヤ度ーー兵種ゆうらられ保よく敵之助の勢あるいやや
打ぶるあて長者陽初と雑ア下ゆもヤ度ちに能力を與ゑセ
ゑるーー拙れで刀方支度同じく廣度ゆ方出る敵を手ひよ合
ゆれで風所ゆあーー敵て面此程と兵ゑ稼ども一大刀合せしるよら
折柄見ゆるる面さし恰好玉幡ゆ松ゆて生遭ーー那曲者と
彼諸善に使ゆ仰ると刀方が眩もせん迷まるゆ祖父父母まで
討れる豊ゆ面賊 雑下ゆ海ゆるて兵ゑるあで使ゆと能力

手早ゆ敢聲と廊ーー雑ゆ以浪士ゆ使ゆ出国玉幡の松ゆ
ゆて出遭ーーゆ其時足下人と過ーー兵場ゆ以ゆ重ゆ通ゆ拙く
一太刀合セ其使ゆ刀ゆーゆ間夜形ゆゆ人兵ゑくあゆ必定と思くあり
はらんと聲拙られて典猛ゆ西ゆ出遭ーー強者ハ
見ゆゆくあるゆ兵ゆ武例の海ゆ方ゆ立ゆあるゆのと
討果セーー折ゆ方ゆ今又世子生遭ゆて想ひ拙ゆ対面ゆと
同ゆ雑ゆ大音上兵ゆ其ゆ海ゆ付ゆる勇源ゆ新ゆ村ゆ兵子
同苗倡吉命正雄といゆのゆ祖父ゆ敵ゆ其方ゆ人ゆ
巡ゆ降んとゆ所ゆ方ゆと強甲ゆ形ゆ出遭ゆ上ゆハ兵ゆ早
道ゆ以身常に名字ゆ名ゆく連ゆ去来真鍮ゆ繕ゆ

聲をかくれで豊後も命を惜しみて拔ぬ海勇
源太郎が兒子にてあり居られども海賊の
我手に死人汝も俱に帰なん子世世孫孫致仕
鹿野苑軍太夫といふの名でかく名乗上るとは
をかくるを孝常孫真を変せんかと思れと廣言
聞て倡吉郎汝は切なる云くらん洲度の事奇身を逃れんとも
坊あらんや能今何国へ逃るとそ不道軍太夫
律気に言ふ軍太夫可くと切咲ひ敵呼り做奴系郎広
ものを何人も僕拳を切る拳を安く歩んとも面惜さ
兄弟の素長者も俱に敵と対んと魂皆誠多る者共

軍太夫前後を瞻回し倡吉の仇討ハ必定しる汝等兄弟ハ何故に
我と讐とのふやらんと不審言長者ハ兼て涙を流の敵の
者共如ありてあり此者ハ兒子なれ共ハ義父孝ハ仇復鹿野苑
軍太夫とあれ共須主より孝ハ要者ハ仇討の者ハ家内へ
消へんと関程驚く軍太夫我世道あること椎津家へ必ず急
捕手も迫ん何卒帰る世切所を通れ去んと思惑を
回し彩る上ハ便宜負ハ世度ものを変化ー汝等も我ものを
生間ハ支度にそりかんと勿論某逃隠れんとも敵ひ
あるべきあれ共客舎に到り用意ハ大勢をもて多流
元者生れと勇気の言ふりとも倡吉義鳥も支度

せんと長谷川が家僕に可嘱手を込てる多流よ大縄を解く
軍太夫を監押させ客舎に送れば島〳〵と許多の者に引き
客舎の中ふかくとうこう縁側傳ひ庭前の高塀より跳上るを
頃哉逃るを大勢ゞ一同に火蓋を切て放バ不過軍太夫が衾中を
数ヶ玉を打撃と看くぬれど軍太夫は塀より下へ真倒に
跳落ぬ〳〵と長谷川へ追てくゐ知よ伯書助義多るを
とも凝甲斐と義支度做て出来り是にて軍太夫が
首級を渡せやと一同に門外に立回られども〳〵はかとりて
軍太夫が新ぐ子更て〳〵ぐ手負〳〵任よ舟をや
遠ハ行ぬ〳〵追跡んと伯吉為るを引續き長谷川始
許多乃家僕手多り世所へと帰行

自来也説話巻之四終